

幼児・児童のジェンダー間勢力の知覚

相 良 順 子¹

PERCEPTION OF POWER BY GENDER IN PRESCHOOL AND MIDDLE CHILDHOOD

Junko SAGARA

This study tested predictions about the developmental tendency of children's perception of power by gender. Eighty-seven children (6, 8, 10years) were shown cards with pictures of father and mother, man and woman. They were then asked which one of the two persons on the card spoke words of situations given to them. Children's perceptions of power were evaluated by their answer. Results showed that children changed their perceptions from mother was more powerful than father to perceptions that mother and father were equally powerful. Their perceptions of power among parents and that of men and women had a relatively high correlation at age 10. They responded with father and mother, men and women similarly. Sex difference was observed for men and women. At age 6, boys perceived women as more powerful than men, but girls did not. Since those boys perceived mother to be more powerful than father, their perceptions seemed to influence their perception that women were more powerful than men. It was suggested that girls understood the stereotypical power relationship between father and mother, men and women, earlier than boys at age 6.

Key words : power, perception, gender, children.

本研究は、幼児期から児童期までの子どものジェンダー間勢力の知覚²の発達を検討することを目的とする。

本研究でいう勢力とは社会的勢力、つまり“自分の望むように他者の意見・態度・行動を変化させることのできる能力”（今井, 1987）である。本研究では、ジェンダー間勢力として、社会の中での男性と女性との勢力関係と、家庭で子どもにとって最も身近な成人男性と女性である父親と母親の勢力関係を取り上げた。かつて、家庭及び社会での男性の勢力は女性よりはるかに大きいものだったが、近年、女性の社会進出も進み、男性と女性の勢力関係も変化してきている。このような状況の中で、ジェンダー間の勢力関係を子ども

はどう知覚しているか、また、その知覚は幼児から児童期にかけてどう変化するのかを検討することは意義のあることと思われる。

ジェンダー間の勢力に関する青年、成人期の認知の研究は多い。例えば、500人以上の大学生を対象に男女の勢力の知覚を調べた Lips (1985) の調査では、多くの学生が男性の方が女性より勢力が大きいと知覚していた。また、成人を対象にして期待される男性像、女性像を調べた伊藤 (1978) の調査では、男性性として“指導力のある”、“意思の強い”のような勢力に関係する形容詞が選ばれていた。青年期を対象とした山口 (1985) の研究でも、“威厳のある”、“権威的である”、“指導力のある”、といった表現が男性性として使われている。このように、男女間の勢力関係について大人はステレオタイプ的な概念をもっている。

しかし、このような勢力関係の概念の形成時期にある幼児、児童期の子どもを対象にして、男女間の勢力

¹ お茶の水女子大学 人間文化研究科 (Ochanomizu University)

² 一般に勢力の研究では他者の勢力を認知することを power perception と表現するので、本研究では勢力の知覚と表現する。しかし、勢力知覚に関係ない箇所では認知と表現する。

の知覚を実証的に調べた研究は非常に少ない。

児童期が含まれる研究のなかで、東・田中・土屋(1973)は小学生から中学生までを対象にして性役割認知の発達を調べている。彼等は性役割の認知を、外面的事実、個人的行動、社会的行動、内面的特性に分け、その多次元性を証明した。さらに、支配的・服従的という勢力的特性を含めた社会的行動の理解は他の認知次元より遅れることも示した。社会的行動の理解については中学生でも成人と異なる認知をしている子どもがいた。

しかし、子どもは言葉で表現された男女の一般的な勢力的特性の違いを理解する時期より早期に男女間の勢力関係を概念化していると考えられる。例えば Emmerich (1961) は、6歳から10歳までの子どもを対象に父母の相対的勢力の知覚を調べた。この結果、6歳後半から、母より父のほうが勢力が大きいと知覚していることを報告している。東ら (1973) の研究に比べて Emmerich (1961) の研究では、子どもはかなり早期に父母間の勢力関係を概念化していることになる。この違いは、主に、東ら (1973) は質問紙法を使用したのに対し、Emmerich (1961) は絵画刺激を用いたという方法の違いに起因すると考えられる。

子どものジェンダー間の勢力知覚を測る方法は、重要な問題である。本研究では、幼児のような年少の子どもが含まれているので、ジェンダー間の勢力の知覚を測定する試みとして Emmerich (1961) の研究で使われた方法が有効であると考えた。この方法は、父母間の会話を想定した上で、絵刺激を使って父母間の勢力を測っているため、言語能力に左右されないという利点をもっている。Emmerich の勢力測定項目は社会的場面での台詞を元にしていて、しかし、彼の尺度は、夫婦間勢力の知覚を参考にすると不十分な点がある。夫婦間の勢力を扱った研究の多くは、勢力を、資源 (e.g. 教育、収入など)、勢力プロセス (e.g. 話す時間)、だれが意思決定をするか、の3つの面で測定してきた (Babcock, Waltz, Jacobson & Gottman, 1993)。このうち、収入に関してどちらが勢力があるかという点と意思決定の側面は幼児でも認知することができ、勢力関係の判断に重要であると考えられる。従って本研究では金銭のやりとりと意思決定にかかわる2項目を追加した。

上記した東ら (1973) と Emmerich (1961) の研究結果の相違は、さらに、勢力的特性の理解と父母間の勢力関係の理解という測定対象の違いにも起因すると考えられる。東らの研究では一般的な男性と女性の傾向としての特性を聞いているが、Emmerich (1961) の場合は父母という比較的単純な二者関係の認知であるため、

父母間の勢力関係の概念は早期に現れたものとみられる。

本研究では勢力知覚の対象として“父母間”と“男女間”の勢力を取り上げた。父母と男女に対するイメージを調べた深谷 (1970) の研究では、成人の場合、両者が非常に類似していた。父母間の勢力関係と男女間の勢力関係は、役割が概念化された後は、母 (女性) より父 (男性) が勢力が大きいと知覚されるという点で、ほぼ一致すると考えられる。一方、男女の勢力関係の概念化が未熟な子どもの場合、必ずしも両者は同一ではない場合があるだろう。“父母間”には、家庭の中の具体的な父母関係が反映され、“男女間”には、イメージとしての男女の勢力関係が反映されると考えられる。

1. **勢力知覚の変容** ジェンダー間勢力の知覚の発達の变化に寄与するひとつの要因として、子どもの性役割の理解がすすむことが考えられる。子どもの性役割の理解にはいろいろな次元があり、その次元が獲得される時期はさまざまであることが知られている (Martin, Wood & Little, 1990 ; Deaux & Lewis, 1984)。例えば、男女というカテゴリーがあるという基礎的な認知は2, 3歳ごろ獲得され (Serbin & Sprafkin, 1986)、そのカテゴリーには文化的に定義されたステレオタイプが存在するという知識は、4, 5歳までには完全に理解される (Martin & Little, 1990)。しかし、子どもがステレオタイプの思考・人格特性を理解するのは、玩具や活動への好みが見れる時期よりかなり遅れることが見出されており (Huston, 1983, 1985)、9歳か10歳でピークに達するという指摘もある (Martin, 1993)。このような知識の増加とともにジェンダー間の勢力関係の理解もすすむであろう。本研究では、幼児期から児童期に至る子どもの父母間、男女間の勢力の知覚の変容を検討する。

2. **父母間の勢力知覚と男女間の勢力知覚との類似性** 子ども、特に幼児の性役割の認知を考える際、父親と母親の影響は強い。父母の役割認知は、一般的な男女の役割認知のプロトタイプとして働くと考えられている (Huston, 1983)。最近の研究でも、父親と母親の男性性や女性性が4歳児の子どもステレオタイプの知識に影響することが示されている (Turner & Gervai, 1995)。幼稚園児のような年少児は、男女間の勢力関係のステレオタイプの理解を含む社会的認知の発達が十分でないため、男女間勢力知覚に関しては自分の最も身近な男女である父母の勢力関係の影響を強く受けると考えられる。そこで本研究では父母間の勢力知覚と男女間の勢力知覚との類似性を検討する。

3. **勢力知覚の性差** Lips (1985) の研究では、女子学生より男子学生の方が男性が勢力が大きいと認知し

ていた。Emmerich (1961) の研究では、勢力の知覚の性差は報告されていない。勢力知覚と関連する性役割のステレオタイプの研究では、女子は男子よりもステレオタイプ化されていない反応を示すとされてきた (Huston, 1983)。しかし、Signorella, Bigler & Liben (1993) は女子の方がステレオタイプの知識を男子より多く示すと報告しており、性差についての結果は一貫していない。そこで、知覚の性差を検討した。

方 法

尺度 本研究では Emmerich (1961) の作成した尺度 (項目) を参考にした。彼は、親子の役割概念を勢力と態度の二次元に分類し、想定される社会的行動を16項目で表現した。本研究では、ジェンダー間の勢力の知覚を調べるため Emmerich の尺度の一部に7, 8の二項目を追加した。(TABLE 1を参照) 「もう休んでもいいですよ」と許可を与えたり、「このお金あげますよ」という金銭のような資源を統制できることが、ジェンダー間の勢力を表現すると考えたからである。

被験者 船橋市内の幼稚園年長児 (平均年齢 6.0, レンジ 5.6 - 6.4) 22名 (女子 11名, 男子 11名), 小学2年生 (平均年齢 8.1, レンジ 7.7-8.5) 33名 (女子 18名, 男子 15名), 小学4年生 (平均年齢 10.1, レンジ 9.7-10.6) 32名 (女子 18名, 男子 14名)。以下、幼稚園, 小2, 小4と記述する。

被験者は全員両親が揃っている家庭の子ども³である。実験の内容についてはあらかじめ教師を通じて両親に了解してもらった。母親の有職率は、幼稚園で27%, 小2で28%であった。

TABLE 1 勢力知覚の項目と主成分への因子負荷量

項 目	父母対象	男女対象
1. これあげますよ	* .440	* .506
2. よくやりましたね	* .331	* .374
3. とてもじょうずにできましたね	* .517	* .478
4. これはあげられません	-.061	-.085
5. 言うことをききなさい	* .403	.179
6. うまくできませんでしたね	.148	* .452
7. もう休んでもいいですよ	* .317	.105
8. このお金をあげますよ	* .328	* .348

注. 上記7, 8が本研究での追加項目である。

*の項目が最終的に使用した尺度

³ 両親が揃っていない子どもについても、実験は揃っている子どもと同じ手続きで行った。

材料 16センチ四方のカードに書かれたイラスト風の絵刺激を用いる (FIGURE 1参照)。

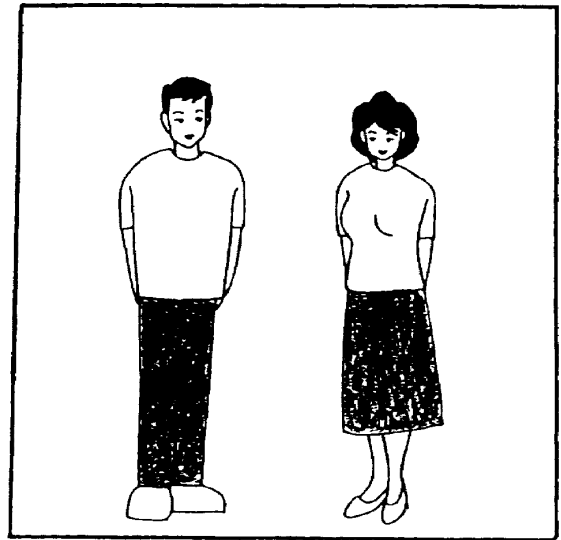


FIGURE 1 絵刺激の例

成人男女の色付カード (父母カード) 8枚, 白黒の成人男女の絵 (男女カード) 8枚。カードの絵は父と母, 男女のペアである。それぞれのペアは同じ上着をきており男性はズボン, 女性はスカートを着ている。

手続き 実験は個別に行う。実験者 (女性) は被験者の横に座り、父母カードまたは男女カードを提示する。カードの1枚を提示して導入する。

父母カード 「教示」: 「今からカード遊びをします。この人をあなたのお父さん, こちらをお母さんだと思ってね。2人で話しています。ごはんまだですか, と言っているのはどちらですか。」被験者がどちらかを指したら, 「お父 (母) さんがお母 (父) さんにごはんまだですか, と言っているんですね。」と, 実験者は被験者の反応を確認する。「そんなふうにして指で指して行ってね。」と言って始める。例えば, 「これ, あげますよ, と言っているのはどっちですか。」と質問していく。質問の順番は前もってランダムに決めておく。カードは同じ色が続かないようにする。実験者は各質問ごとにカードをめくっていく。被験者は指で指しても言葉で答えてもよい。実験者は答えがでるまで待つが, 被験者がわからないと答えた場合は次の質問に移る。

男女カード (白黒) 「教示」: (男女カードを提示して) 「今度は, 男の人と女の人だと思ってね。2人で話しています。どちらが言っているか指で指して行ってね。では, 今何時ですか, と言っているのはどちらですか。」被験者の反応を言葉で確認して, 勢力項目に移る。

父母カード (父母セッション) と男女カード (男女セッショ

ンのどちらが先かは、被験者の中でカウンターバランスをとる。どのカードについても男女の位置は質問の度に変わる。なお、このようなカード上の人物を見せる方法では、子どもは父母間、または男女間との会話ではなくて、自分とカードの人物との会話であるとみなしてしまう可能性がある。この可能性をできるだけ少なくするため、導入項目の他に、カード上の人物の間の会話であることを意識しやすい項目で実際の生活場面でよく話されている、と思われる項目を勢力項目の中に挿入した。具体的には、父母カードについては「ってきます」「おかえりなさい」の項目を、男女カードには「今何時ですか」「荷物持ってあげますよ」の項目を加えた。従って最終的に使用したカードは導入用も合わせて、父母カード、男女カード各11枚である。

得点化 父親（男性）であると答えた場合に1点とする。得点範囲は0～8。点数が高いほど男性が勢力が大きいと知覚していることになる。

結 果

項目の検討 尺度の妥当性を検討するために父母と成人男女という対象別に主成分分析を行った。その結果、両者とも第一主成分が得られた。父母を対象とした場合の第一主成分は、4, 6の2項目を除く1, 2, 3, 5, 7, 8の6項目で構成され、成人男女を対象にした場合は、4, 5, 7の3項目を除く1, 2, 3, 6, 8の5項目から構成されていた(TABLE 1 参照)。負荷量の少ない項目を除いた後の主成分分析では、父母が対象の場合、第一主成分の負荷量の絶対値は.34以上であり、第一主成分への寄与率は32.8%であった。成人男女の場合は第一主成分の負荷量の絶対値は.38以上であり、寄与率は35.5%であった。このように尺度の一元性が確認されたので、父母が対象の場合、上記6項目の合計を父母知覚得点、成人男女が対象の場合、上記5項目の合計を男女知覚得点とした。

次に、父母セッションと男女セッションの順序効果を小2と小4⁴に対して学年×順序の二要因分散分析で調べた。父母セッションが先か、男女セッションが先かの順番について有意な効果はなかった($F(1, 86) = .17, p > .10$)。

勢力知覚得点

父母知覚得点と男女知覚得点は、TABLE 2 に示した。

1) 父母知覚得点

学年（幼稚園、小2、小4）×性（男子、女子）で2要因の分

⁴ 幼稚園児は、父母と一般男女という対象を混同し、男女も父母とみなす傾向がみられたので、父母セッションを男女セッションの前に置いた手続きで行った。

TABLE 2 学年別の父母知覚得点、男女知覚得点
(平均点と標準偏差)

	幼稚園		小2		小4	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子
父母知覚得点	1.91 (1.04)	2.09 (1.30)	3.33 (1.68)	2.53 (1.69)	3.39 (1.75)	3.15 (1.68)
男女知覚得点	2.82 (1.40)	1.36 (1.12)	2.83 (1.58)	2.27 (1.53)	2.56 (1.38)	2.71 (1.54)

(SD)

注. 父母知覚得点は最高6点、男女知覚得点は最高5点

散分析を行った。その結果、学年の主効果($F(2, 83) = 4.48, p < .05$)が有意であった。性の効果と交互作用は有意ではなかった。学年が上がるにつれ、全体的に父親より母親が勢力が大きいという知覚から、父親と母親を同等の勢力であるという知覚に変化することがわかった(Figure 2 参照)。

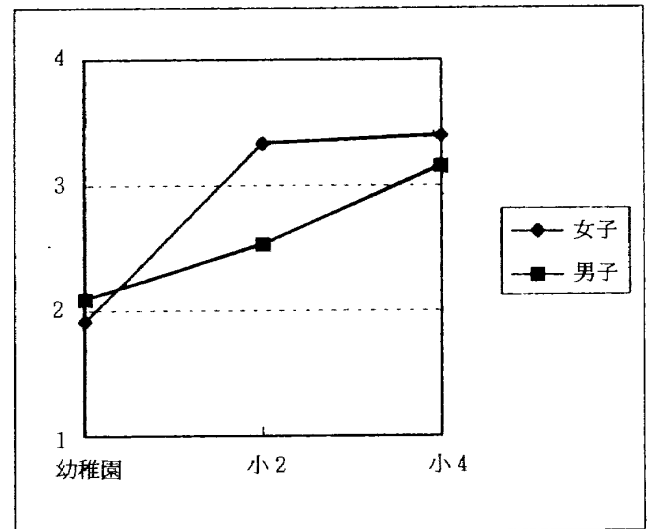


FIGURE 2 父母知覚の発達の变化

2) 男女知覚得点

学年（幼稚園、小2、小4）×性（男子、女子）で2要因の分散分析を行った。その結果、性の主効果($F(1, 81) = 3.81, p < .10$)が傾向としてみられた。学年の効果と交互作用はみられなかった。男子は学年が上がるにつれ、女性より男性が勢力が大きい方向へと知覚する傾向がみられたが、女子では学年による得点の変化はなかった(Figure 3 参照)。

父母間の勢力知覚得点と男女間の勢力知覚得点との相関 父母知覚得点と男女知覚得点の相関を調べたところ、幼稚園児で.17(n.s.), 小2で.30($p < .10$), 小4で.57($p < .01$)となり、学年が上がるにつれて相関は高くなる傾

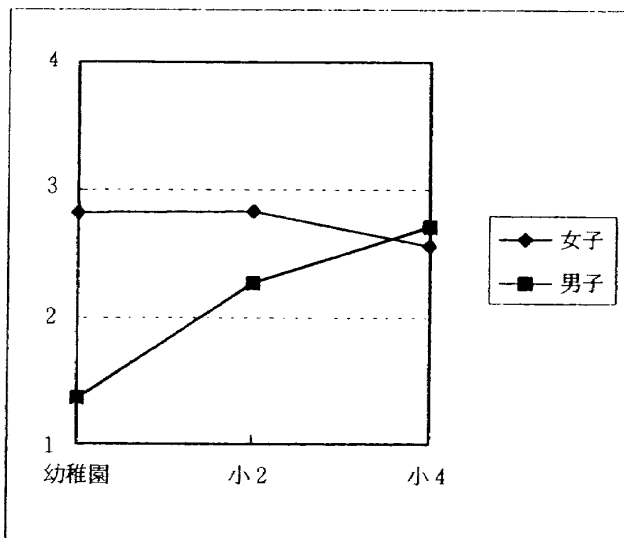


FIGURE 3 男女知覚の発達の变化

向にあった。小4では、父親の勢力を大きく知覚しているほど、男女間の男性の勢力を大きく知覚し、母親の勢力を大きく知覚しているほど女性の勢力を大きく知覚していることが示された。男女別では、幼稚園児で男子は.54 ($p < .10$), 女子は.08であり、父母知覚得点と男女知覚得点の相関は小2, 小4に比べると大きな性差はみられた(相関の差の検定では有意ではなかった)。

さらに、父母知覚と男女知覚に共通する4項目について、父母知覚と男女知覚の得点の差を調べた。幼稚園児と小2では、項目によって両得点の一致率が42%~69%まで大きく変動したが、小4では4項目一貫して60~70%の一致率を保っていた。

考 察

勢力知覚の発達の变化 子どもの年齢が上がるにつれ父親より母親の勢力が大きいという知覚から父母の勢力が同程度のものであるという知覚へ移行する過程が示された。子どもの父母間勢力の知覚の変化には、性役割の知識の増加、父母の勢力関係を知覚できる能力の発達、といった認知能力の発達が反映されていると考えられる。また、その背景には幼稚園から小学校へ移り、学校教育の中で男女の伝統的性役割を反映する環境から影響を受けるようになることもあったと考えられる。

男女間の勢力知覚については、父母間の勢力知覚ほど明確に学年による変化はみられなかった。これは、女子において勢力知覚の発達の变化がみられなかったことによるものと考えられる。しかし、男子の男女間の勢力知覚は、父母間の勢力知覚と同様に、女性が勢力が大きいという知覚から男女の勢力が同程度のもの

であるという知覚へ移行した。

本研究における幼稚園児の勢力知覚の内容は、Emmerich (1961)の研究と異なっていた。彼の研究では6歳半以上の年齢の子どもは、母親より父親の勢力が大きいと知覚していた。それに対し、本研究においてほぼ同年齢にあたる幼稚園から小2までの子どもの父母の勢力関係の知覚は、全体的には母親の勢力が大きいと知覚していた。日本の家庭では、存在の希薄な父親に比べ、母の役割が強調されているという指摘がある(瀬知山, 1996)が、そのような父母関係が幼稚園児の知覚に反映されたという解釈も可能である。

父母間の勢力知覚と男女間の勢力知覚との関係 父母間の勢力知覚と一般男女間の勢力知覚との相関関係は、全体的に学年が上がるにつれ強まった。学年別に細かく調べると次のような特徴がみられた。

父母知覚得点と男女知覚得点間の相関を見ると、まず、幼稚園児では有意な相関はみられなかったが、男子は相関が女子より高くなる傾向を示した。小2では男女とも相関はみられなかったが、小4になると有意な相関が認められた。小4の反応は、深谷(1970)の研究で、成人の父母と男女に対するイメージが非常に類似していたことと一致している。

小4の相関は、幼稚園の男子でみられた相関とは質的に異なると思われる。先のHuston(1983)の見解によれば、幼稚園男子の相関は、父母の勢力関係を元に男女関係が判断されていると考えられるのに対し、小4では、父母及び男女の勢力関係のステレオタイプの影響を受けていると考えられる。この問題は今後、幼児の父母間の勢力知覚と実際の父母の勢力関係を詳しく調べ検討されるべきであろう。

勢力知覚の性差 性差は幼稚園児の男女知覚得点で傾向としてみられた。幼稚園男子は、男性より女性のほうが勢力が大きいと知覚していたが、女子ではその傾向はみられなかった。小2, 小4では性差はなかった。幼稚園の男子が男女間の勢力知覚において男性より女性の勢力が大きいと知覚する傾向から、男子は女子に比べ父母間と男女間の勢力関係の区別が明確にされていないと考えられる。また、父母知覚得点において、女子の得点の変化は幼稚園から小2にかけて父親と母親の勢力が同程度に大きいと知覚する方へ変化している一方、男子は、小2ではなお母親が勢力が大きいと知覚していた。このように、男子より女子のほうが父母間の勢力の知覚における変化は早く生じるようである。これは、認知的発達の性差だけでなく、同一視の対象が女子が母親であることを考えれば、母親と女子

の接触時間や日常生活の接触パターンが父と男子のそれと異なっていることを反映しているとも推測できる。このような勢力の知覚の性差は、今後、人数を増やすことで明確に示される可能性が高いと思われる。

以上、勢力知覚について要約すると、幼稚園児から小4の間で、父母間、男女間の勢力関係の知覚の変容について情報が得られたといえる。また、幼稚園児の男女の勢力関係の知覚には性差があり、女子より男子のほうが母親が勢力が大きいと知覚している可能性が示唆された。

最後に、本研究では勢力を測るために使用した尺度の問題を取り上げる。実験で使った尺度は、Emmerich (1961)の尺度の一部と新たに本研究で加えた2項目から成る。Emmerich (1961)の尺度はもともと親子と父母の勢力関係を測るために作成されたもので、本研究ではこれを一般男女の勢力関係にも使用した。このため、項目分析の結果、一般男女の尺度は項目数が減り、明確な結果が得られなかった。本研究で用いた尺度は、一般的な男女の勢力関係のイメージを測るためには、設定された会話だけでは不十分であったかもしれない。今後、尺度の項目を増やし、尺度の精度を上げると同時に、例えば質問調査のような別の方法で勢力知覚の調査をし、本研究の方法の妥当性を詳細に検討することが必要であろう。

引用文献

- Babcock, J.C., Waltz, J., Jacobson, N.S., & Gottman, J.M. 1993 Power and Violence: The relation between communication patterns, power discrepancies, and domestic violence. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **61**, 40—50.
- Deaux, K., & Lewis, L.L. 1984 Structure of gender stereotypes: Interrelationships among components and gender label. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 991—1004.
- Emmerich, W. 1961 Family role concepts of children ages six to ten. *Child Development*, **32**, 609—624.
- 深谷和子 1970 性による socialization の成立過程—性差意識の研究(そのII)— 東京教育大学教育学部紀要, **16**, 197—213.
- 東 俊子・田中久子・土屋和子 1973 性役割認知の発達 教育心理学研究, **21**, 48—53.
- Huston, A.C. 1983 Sex typing. In P.H.Mussen & E.M.Hetherington (Ed.), *Handbook of child psychology*, Vol.1 New York: Academic Press. Pp.258—296.
- Huston, A.C. 1985 The development of sex typing: Themes from recent research. *Developmental Review*, **5**, 1—11.
- 今井芳昭 1987 影響者が保持する社会的勢力の認知と被影響の認知・影響者に対する満足度との関係 実験社会心理学研究, **26**, 163—173.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, **26**, 1—11.
- Lips, H.M. 1985 Gender and the sense of power: where are we and where are we going? *International Journal of Women's Studies*, **8**, 483—489.
- Martin, C.L. 1993 New directions for Investigating children's gender knowledge. *Developmental Review*, **13**, 184—204.
- Martin, C.L., & Little, J.K. 1990 The development of gender stereotype components. *Child Development*, **61**, 1427—1439.
- Martin, C.L., Wood, C.H., & Little, J.K. 1990. The development of gender stereotype components. *Child Development*, **61**, 1891—1904.
- 瀬知山角 1996 東アジアの家父長制—ジェンダーの比較社会— 勁草書房
- Serbin, L.A., & Sprafkin, C. 1986 The saliences of gender and the process of sex typing in three-to seven-year-old children. *Child Development*, **57**, 1188—1199.
- Signorella, M.L., Bigler, S.R., & Liben, L.S. 1993 Developmental differences in children's gender schemata about others: A meta-analytic review. *Developmental Review*, **13**, 147—183.
- Turner, P.J., & Gervai, J. 1995 A multidimensional study of gender typing in preschool children and their parents: personality, attitudes, preferences, behavior, and cultural differences. *Developmental Psychology*, **31**, 759—772.
- 山口素子 1985 男性性、女性性の2側面についての検討 心理学研究, **56**, 215—221.
- 湯沢雅彦 1995 新しい家族学 光生館

謝 辞

本論文の作成にあたり、ご指導いただきましたお茶の水女子大学春日喬教授、内田伸子教授に厚く感謝いたします。

(1997.5.14 受稿, '98.3.14 受理)